

かし

ある僻地の人間模様

炊きたちと女教師

大西登志 著

芙蓉書房

〈略歴〉

大西 登志（おおにし とし）

大正4年8月，三重県志摩郡浜島町に生まれる

現住所，三重県志摩郡浜島町南張1580

同，^{わたらい}度会郡南勢町立宿田曾中学校勤務

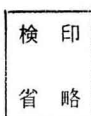
名古屋市 東海文学同人

^{かし}
炊きたちと女教師

～ある僻地の人間模様～

昭和45年3月29日 第一刷発行

定価 570円



禁無断転載

著者 大西 登志

発行者 上法 快男

発行所 株式会社 芙蓉書房

東京都千代田区神田須田町1-28

電話東京 (03) 252-7376(代表)

★落丁本・乱丁本はおとりかえします。 振替口座 東京104799

印刷 豊国印刷(株)，写真製版 (株)興陽社，製本 佐久間製本(株)

© 1970 T. Ōnishi 0095-010117-7344 Printed in Japan

ある僻地の人間模様
かし
炊きたちと女教師

大西登志著

芙蓉書房

序 文

玉川大学学長
小原國芳

私はサツマ半島の突端に生まれました。左は太平洋、右は支那海。雄大そのもの。二百十日前後には秒速六〇米、七〇米という突風が襲います。山もきつい。島々も多い。竹島、石垣島、黒島、硫黄島等の川辺七島が遠く点在して居ます。鯨の格好に見える「黒島」が丁度、私たちの村の遠方に浮んで居ます。

こうした少年の頃、聞いたものです。その先生夫婦のことを。校長兼訓導、兼書記、兼小使。島の御葬式も結婚式も、お産の世話も子供の名つけも、月一度の手紙の山、島の人たちの代筆、相談役……。全く、島の王様。その心意気全く羨しい限りです。みな偉大な宗教的境地です。ゼヒとも教師養成大学では「宗教哲学」を必修科に！して欲しいことです。教師養成大学では特に、「教師論」に力を注いで欲しいことです。

ホントに日本中、尊い方々がアチコチに居られます。実は、ホントの教育は僻地学校でこそ行われる、のではないのでしょうか。マコトの個性尊重も、自学自律の教育も、共同学習も……。

「二、三年たったら都へ帰れる」で誘惑してはいけない。自ら、継続的な方針や研究や施設はできない。ホンモノは生れない。単身赴任が多いから、逃げ腰の人が多。村人とのナジミも容易でない。

だが、ガンバッテ下さい！

玉川の三万人の通信大学生の中には実に、僻地で苦勞しとる人が多いのです。山奥、離れ

島、漁村で！日本のアチコチで税金でまかなつとる大学を出ても、辞令をもらつても、僻地に行かぬ氣風があるように聞きます。もし事実だとしたら、何という卑怯なことでしょう！やむを得ず近くの高校出身者が仮免状で雇われる。玉川の通信教育部に集つて来てくれるという人が多いのです。

この本の著者、大西先生もこの夏季スクーリングの私の教え子です。

「汝自身を知れ」とは哲学の始めでありかつ終りなのだよ……と私が礼拝堂の始業式で述べたことはをよくかみしめてくれた一人です。私の全人教育、創造教育を奥志摩の僻地漁村の中学教育によくぞ生かしてくれたものと感じています。

きつと宿田曾の中学生は大西先生をいつまでも忘れず、船の炊きかしになつて遠洋漁業から帰つてくると、先生の許に集まつて昔話しに花をさかせ、そして自分の未来に先生の助言を求めることでしょう。

その場限りの教育、切り売り教育には見られない美しさが、そこにはあります。

こうした純真さ、こうした真剣な精進、美しい師弟の結びつきが花開いているこの本を読んで私も力づけられたことでした。

どうぞ、ホントに辛いでしょうが、「聖なる愚人」になつて下さい！ 崇い修行です。

昭和四十五年三月

目次／炊^{かし}きたちと女教師

序 文…… 小原國芳

第一章

一 女教師は子守	11
二 黙ってかえった客	16
三 ここにも戦争の破片が……	26
四 海女 ^{あま} とても陸こそよけれ桃の花	28
五 第一回職員会議	37
六 職員会議ノイローゼ	47
七 屋根のうえの靴	55
八 血液型騒動	58

第二章

一 私は嵐が好きでした

67

二 番小屋の娘

74

三 アイヌ踊りと、ミィミィヨォーヨォー

86

四 漁村の娘たち

91

五 蜆まむしの運び屋

98

六 バイスケと戦う

106

七 黄色い風

115

第三章

125

一 ざわめく海

127

二 勇敢な、ナポレオンとジョニ黒

132

三 海の土産

141

四 学校は卒業生のたまり場

148

五 爺いたちの死

169

六 ふたたび番小屋の娘に

178

七 狂った愛

180

八 宿中プラスバンド

187

第四章

一 そのさまざまな拾い

193

二 桂島

214

三 この道は

227

四 玉川の全人教育

234

五 パテント、これさえとつたら

240

六 碧い家

256

七 原始人バスに乗る

269

八 私は入道雲

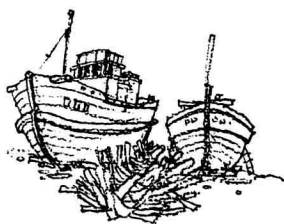
271

あとがき

276

装丁 安野光雅
カット 田中満

第一章



一 女教師は子守

びようぼうとした大海原を一直線にまとめ、空をたちきつてたなびいている水平線。

その直線の魅力。空莫とした充実。壮大で、豊かで、甘美な夢が板のような胸のとびらをたたいてくれるのです。

前島（さきしま）半島の熊の灘がわは直線の魅力で、人々を幻惑するところ……そして、その内がわになる英虞湾は、せっかくの網子湾を、ややこしい文字にかきかえられてしまったのです。明治政府の要人たちのご厚意にちがいありませんが、網子といい、田子という歴史を抹殺する理由など、どこにもなかったはずです。私には、ひなびた志摩人のひなびた考えが、いまもって悲しいのです。

でも、御木本真珠らしい沿岸の人々はいささかしやれて、真珠湾などとよんでおります。そりやそうでしょうとも……。全く相反する個性の緑と紺が、くびれにくびれ、もつれにもつれて、沿岸曲線の粋を余すところなく見せるたおやかな内海なのですから……。

たいらな水面には、杉の丸太を縦横に組んだ真珠養殖筏（タンボ）が、ドラム罐のげたばきで威厳をたもって四角四面に浮いています。とにかく、海のはての王妃の胸や指をかざる真珠も、この内海からでていくのですから。

真珠湾は前島半島を防壁にしてできているわけですが、その防壁の半島全体は、襲のあさい丘陵地形をしておりますから、陰らしい陰がありません。したがった前島人は、潮風のなかの日向臭さをもっています。陽気でのん気で原始的でさえありました。

女たちは赤毛が多く、皮膚も四季をとおして渋茶色だし、からだから潮の香りがただよっている感じも、そこが海女の里だからでしょうか。

当時はまだへ先生ヤーイの時代でありました。新任ながら、三十六歳の私でも拾ってくださいる校長がありまして、私は半島の一僻村の組合、立片田中学校へ赴任しました。

生徒数は三百余人。志摩の国では、ごく普通の中学校でしたが、校長室などありませんでした。

職員は十三名。ハリウッドにおられた英語教師。戦後の一時期には、蜜柑のたたき売りまでして露命をしのいだとわらう東北帝大出の理数教師。音痴で風がわりな音楽教師。翌年には、経済的に有望な真珠養殖業へ転職していった三人の若々しい同性の教師。思考力ゆたかで、伸縮自在な土地出身の教師たちでしたが、妻子を養うには、余りにも微々たる俸給でしたもの。無表情

で、なにを考えておいでか見当もつかない退職校長の再登壇。彼は平教師でありました。

種々雑多な顔ぶれの集合体にはちがいありませんでしたが、奥志摩の空にも似て、じつに朗々とした職員室でありました……。コミュニケーションの破裂は再々おこるのです。それは、瘦身の俳人教頭と、黒シャツ党のムッソリーニに似た岩盤のような教師との間に、しばしば突風のごとく、竜巻のごとく……。猪突主義の校長は、またか、と眉間をよせてなだめ役……。かといって、職員が内部分裂をおこしている様子もなく、単なる二羽の軍鶏の蹴合いで終わりました。この対照的な性格の軍鶏は、それほどに、教育に対する責任と情熱に燃えていたように思われしました。二人とも土地者で、大声でわめきあえるほど、気心がしれていたんです、きつと。

女子バレーボールは、県下の優勝校でしたが、リーダーの教師が真珠養殖業に転職して海へおりてしまいますと、優勝旗も校門からでていったと後日うけたまわりました。

職員室が明かるければ、生徒もまたそれにつづき、まるで空の水色の精のようでした。……が、男女の平等などおおよそ空文で、女教師は男教師よりはるかに程度が低いものにきまっておりました。そのきららかな明かるさと、僻村の封建性と、新憲法とは、恨みつらみもないまま、相住まいをしておりましたから妙なことです。

三十六歳の新任教師は、とくに兄ちゃんのように巨大な三年男生徒に恐怖を感じ、東京都の玉川大学の通信教育を受け、新教育のなんたるかを根本からやりなおす決意を固めました。そこに

は、小原学長をはじめ、篠原教授、鰺坂教授など、教育学の泰斗が、くつわをならべていらっしやる。私は昭和はじめの師範教育がなんの役にもたないことをしたのです。

色こそ大分あせておりますが、職員室の紅一点……とは申せ、学校とはなんと忙しい職場ではありませんか。教師のほかに女中仕事もあるのです。そしてそのわりに俸給袋のかるいこと。だいたい二十日分の生活費しかありませんでした。

ある日、浜へむかつて走る生徒たちの後を追いました。なんとはなく、そんな気分させられていたのです。水平線が見たいような……ところがどうでしょうか。私はみごとな場面に激突した感じでありました。

白浜には、沖の岩礁へ、かずき（もぐり）にいつていた海女^{あま}たちの磯舟が、なんばいもならんでおりました。沖の磯は、ひき潮になりますと、細長い岩礁を海面にばたつと現わし、磯遊びの快味をしている陸者に、地だんだをふませるほどの魅力がありました。反面、その岩礁ゆえに、この村の女たちは海女を生涯の職業にしなければならなかったのです。

磯舟の洞間は、もやいの海女たちの、あわびでふくらんだ網袋の山でした。その網袋を天秤棒の両はしへ、ヒョイとひっかけてもらう生徒たち……。母と子は、一言も交じませんでした。生徒は、一目散に浜をかけ、集荷場へ……。まだやわらかい肩に食いこむ天秤棒は弓なりになって、肩の骨ときしみあう音が、ギョギョ聞こえそうでした。そして、ぎりぎり一ぱいゆがん

だ顔を汗が洗います。

「おまえシェンシェーかア。おらげの、どもならんやろがわりことしたらくらわしたてエ」

耳さきで、半鐘をたたかれた感じの声……。しかし、潮照りした逞しい海の精の、まばゆいほどきららかなからだ。

「シェンシェーやあ。上手に子守しておくれエやあ」

ここでは、女教師は子守でありました。

頭髮も、眉毛も、肌もアラメ汁でそめつけたような大勢のなかに、なんんかは、あわびに似ている顔がありました。海亀の目に似ている目も——。そして、なんんかは、私のついちかくで、股をやや開き尻をぐっとうしろへ突きだして、立小便をしました。

「シェンシェーやあ、もてかんせ」

彼女たちは、私をもてるだけあわびをくれるのですが、それは、岩からはずしそこねて貝のこわれたものばかりでした。

私は彼女たちの指導のとおり刺身にしたり、醤油で味つけしたり、塩ゆでにしたりして、四、五日は、あわびにつかつておりました。ついには、指先もはく息もあわび臭くなり、これだけを料理屋で食べたら、私のかるい給料袋など、たちどころにふっ飛ぶであらうなどと……。ああ、さもしさもあり。